根付く

宮崎に根付く企業の誘致から現在までをレポート

世界ブランドの誇りを持って、マイスターが手がける生産ライン

宮崎ダイシンキヤノン株式会社

代表取締役社長・**樋口二郎**さん

エンドユーザーの視点で作る完成品

宮崎ダイシンキヤノン株式会社は、1980年に宮崎県の誘致企業として木城町で創業。当時キヤノンのコンパクトカメラで人気機種だった「CANON AUTOBOY(オートボーイ)」の組み立て工場として約100人規模でスタートした。

小丸川沿いにある工場

設立に当たっては、キヤノン株式会社と大新産業株式会社が各50%の出資で、キヤノンの関連会社の位置づけであった。「大新産業の社長が宮崎県の出身で、そのご縁もあってこの場所になりました。その後、工場も少しずつ大きくなってきました」と話すのは創業当初から同社を率いる代表取締役の樋口二郎さん。

時代の変遷で、当初から作っていたフィルム式の一眼レフやコンパクトカメラから、プリンター「BJ(バブルジェットプリンター)シリーズ」の製造に変わったのが1993年。さらに2001年からはデジタルカメラの製造へと変わっていった。

「作る物が変わっても組み立てライン自体は大きく変わるわけではありませんからその点は応用が利きます」と言う樋口さん。部品の調達から組み立て、出荷前の梱包まで一貫した生産ライン技術を持っているからである。デジタルカメラの場合、メーカーから仕入れる部品は1機あたり500から600個になる。これを組み立てて、完成品に取扱説明書等同包品を全て箱詰めするまでが同社の生産ライン。だから"応用が利く"のである。

今年度の生産台数は年間で362万台。キヤノンのデジタルカメラで最も売れ筋の3～4万円台の機種を中心に作っていて、その数はまだまだ増えると予想している。来年度の目標生産台数は440万台から480万台と見ている。

生産の約8割は海外向けということもあり、外国語仕様の取扱説明書など箱詰めにも気を使う。国内ユーザーであれば、万一の不具合にも迅速な対処ができるところを、海外ではそうはいかない部分も予想されるためである。「日本製全体の信用問題に関わってきますから、梱包ひとつでも大事にしています」。

樋口さんのこうした思いは、社員全体の意識にも自然と入り込んでいる。というのは、「ここでは完成品を作っているから」だと言う。これは同社で作っているのが部品ではなく、キヤノンという世界ブランドの製品をエンドユーザーが手にする形だと意味なのである。製造の最終工程である"作り手"は、商品を選ぶ消費者の目で製品を見ることができるのだ。この世界ブランドの力は同時に、仕事への誇りにつながっていく。

将来が楽しみになる職場へ

最後の箱詰めをする梱包ライン

コスト削減のための生産革新活動も活発に行われている。ベルトコンベアによる流れ作業から、習熟した少人数でラインを構成する「セル生産」方式を確立しており、例えば10人で100台作るところを習熟したスタッフ9人で対応するといった具合だ。この方式だと各人の工夫と努力が直接品質の向上へとつながり、同じ人数で他の製品を作ることも可能となる。特にすぐれた技能を身につけた人を「優秀技能者(マイスター)」として認定する制度もある。

同社ではこのように、携わる人を育てるという姿勢を強く打ち出し、社内研修も専門部署を設けて数多く行っている。その理由のひとつとして樋口さんが挙げるのは、「10年20年と勤めて、会社全体が見えてくると仕事はもっと面白くなる」からだという。

実際、創業当時に地元から採用された社員が、現在部課長として活躍している。県外資本の会社でありながら、上司の多くが地元出身者であることは、若い社員にとって身近に感じられるだけでなく、スキルアップする楽しみが持てる職場となっている。

現在も採用のほとんどが木城町、高鍋町を中心とした地元で、正規雇用が約400人、外部スタッフを入れると約1300人が働いている。組み立ての最終工程を担うラインは昼夜3交替で、男女比は女性6、男性4の割合である。

「派手な開発や営業もない。ただ誠実に、いいものを作るのが私たちの仕事。それをここで息長く続けるのが誘致企業として使命でもありますから」。今春も新卒者40名を含めて地元から採用される。人口5000人の町に根を下ろし、誇りあるものづくりを続けている。

宮崎ダイシンキヤノン株式会社

会社DATA
〒884-0101
児湯郡木城町大字高城4308-1
TEL:0983-32-2233
FAX:0983-32-3149
http://www.daishin-canon.co.jp/